

<事例1>

中2女子I子。仲良しだった級友たちから仲間外れにされ、不登校気味。毎水曜日には、授業には出ないで相談室にSCを訪れるだけの登校を始める。面接の当初では、中年男性の担任教師の冷たさ、頼りなさ、友人の非など訴えては帰る。SCはことあるたびに、担任だけでなく、生徒指導係、校長先生たちもどれほどI子を心配しているかを話して、教師たちへの親和感を育てるように努める。面接4回目からは担任の申し出もあり、担任による面接室へのお茶運びが始まる。その折りに両者の会話は全くないが、お茶運び3回目にはI子は担任に軽く頭を下げ、4回目には笑顔で甘えた風情を示す。当日、面接中にI子が腹痛を起し、養護教諭に手当された後、養護教諭の車で家まで送り届けられた。好機と見たSCの進言によって、I子の帰宅後30分刻みに担任、生徒指導係、校長の順で見舞いの電話がかけられた。想定通り、翌日からI子は嘘のように完全登校を復活。その後彼女は、担任とは県内の美術館巡りをするほど親和し、その支えもあって仲間外れにされた級友たちとも友好関係を取り戻し、3年次に進級するまで、1日として学校を休むことはなかった。

<事例2>

中3男子A。2年生の3学期末から、学級内での仲間はずれと多少の学業不振がきっかけで休みがちになり、新学年になって、それが頻繁になった。5月上旬、修学旅行に出かける日、集合時間を過ぎて家から出られず、家族から連絡を受けた学校側がAと日頃親しい養護教員を迎えにやったが、それに応じることはなく、そのショックが後を引いたか、その後全くの不登校状態になった。

担任は、30代前半の体育の女性教師、課外活動では卓球部の顧問。Aは、その卓球部員で、時折顔を出す担任と放課後の体育館で練習試合をするなど、両者の関係には問題がなかった。しかし、担任が電話で登校を促したり、家庭訪問するなどしても、Aの対応はむしろ素っ気なく、「いつか登校する」と述べる程度であった。

家庭は、共働きの両親と弟妹の5人暮らし。家庭にはとりわけの問題点はないが、両親ともに、子どもを力づくで抑えるようなことは出来ない温和な人物。二人とも、指導力不足で不登校にしてしまったと反省しきりで、Aの状況を頻繁に電話連絡してくるなど、担任およびSCとは積極的な関係を持ち続けた。

SCの関与は、Aが完全に不登校状態になってからである。SCは、Aとの了解の上で、毎週1度、SCの出校相談日に電話相談を行うことにし、その間、担任は後ろに退いて、Aと家族に毎週1～2回の、関係性の保持が目的の「ご機嫌伺い」の電話をする程度にとどめた。折よく、ちょうどイチロー選手がアメリカに渡って活躍を始めたときで、SCとAの会話は、毎回そのニュースが枕言葉の四方山話で盛り上がり、登校問題は一切上がらず、円滑に、しかし取り立ててのこともなく進んだ。突然好機がやってきたのは、1ヶ月も経った頃である。

Aから掛かる前に、母親からそっと電話が入った。Aが最近、年上の高校生や他校の生徒たちと交遊を始め、帰宅が遅くなったり、なにか荒れた感じで苛立ったりすることが多く、心配だとのこと。Aとの相談の中で、SCがさり気なく話題を振ってみると、広がった交友関係が重荷になり、Aが多少の反省と共にそこから抜けたがっている様子が見えかけた。またAは、「先生は元気だろうか」と何気なく担任の様子を伺ってきた。当日、S

Cの仕事終了後、テニス部の生徒から「Aが明日、放課後のクラブ活動に参加するためにやって来そうだ」というニュースを得て、担任がSCに相談に訪れた。担任も了解し、翌日、クラブ活動にやって来るAに、担任がSC考案の下記の文面を自筆書きの文書で手渡し、登校に関する当分の行動について、○印を付する回答を求めることになった。

- ① 朝、学校に来て担任に挨拶をして帰る
- ② 登校して、1時限目の授業を受けて帰る
- ③ 保健室にだけ行って、読書その他、適当に過ごして帰る
- ④ 午前中だけ授業を受けて帰る
- ⑤ 放課後の課外活動だけ参加して帰る
- ⑥ 毎日、授業を全部受けてから帰る

翌日、Aはテニス部の練習に参加。練習終了を見計らってやって来た担任から文書を手渡され、見終えて即座に、「毎日、授業を全部受けてから帰る」に○印をつけて返した。但し、その項目は、SCには無断で、担任によって一番最初の項目①に置き換えられていた。恐らくAは、すでに構築されていた担任との心理的な関係性を基に、その項目を冒頭に置いた担任の思いと熱意を瞬時に読み取り、それに感応したに違いない。

上例と全く同じ、Aは翌日から登校を復活、その後は、病休以外の欠席はなく、担任に暖かく見守られる中で、無事に高校進学を果たした。

本例は、担任の教師権威がもたらした生徒との関係性と日頃の情報収集力が生かされ、それによって危うく対象者が大きな不良集団に巻き込まれつつあった危機場面から救い出し、深刻な不適應への道を未然に防止した好例である。

<事例3>

この事例は、私の遠くなつかしい思い出（佐賀県・小城高校）の中から引き出された、きわめて臨界的なケースである。教師権威の中で、ある意味大変危険な統制的権威をタイピングよく臨床的に用いた成功例である。（『教師の権威と指導力』から引用）

「華美ですなあ」

というのが、親子ほど年の違う荒谷康久先生の口癖でした。当時ではまだ珍しい派手な原色の服装をしてくる女生徒を見つけると、生徒と一緒にの昼食時と言わず、芝生の上での語らいのときと言わず、必ずと言えりほど、そう言うのでした。ときには授業中ですら、窓越しにそんな生徒を見やりながら言うこともありました。「華美」という言葉で何を言おうとしているのかよく分からないところもあったのですが、その感じ入ったような言い方に、みな妙に感動させられました。

そして

「よし、おれたちはいま、大学目指してがんばるときなのだ」

と、気を引き締めたものでした。

荒谷先生は数学の先生でした。授業は実にていねいで明快そのもの、授業が分からなくて騒いだり、落ちこぼれたりする者が出る余地もありませんでした。ですから、先生の方も注意や小言を言う必要もなかったわけですが、いつも微笑をたたえ、やさしく語りかける温厚そのものの姿に、生徒たちは、

「この先生は叱らない、いや、叱れないのかも……」

とさえ思っていました。

秋の運動会が目前に迫ってほとんど準備も終わりかけていた頃でした。朝礼時に突然、運動会フィナーレのファイアストームの中止が言い渡されました。しかも、理由がいまひとつはっきりしません。ファイアストームは生徒たちがいちばん楽しみにしていたものですから、みな口々に、

「理由をはっきり言ってください」

「中止は反対です」

と抗議しましたが、入れられません。理由も示されないままです。校庭は不満の声で騒然となりました。

「やかましい、教室に入れ！」

と係の教師が一喝したのがきっかけで、生徒たちの怒りが爆発しました。

「運動会をボイコットしよう」

「学校の言うことなどきくな」

「運動会は生徒だけで自主的にやろう」

「ファイアストームをやるぞ」

といった声が、学校側を糾弾する怒声の中で飛び交い、日ごろの不満分子が中心になって何百人もの生徒たちが教師集団に詰め寄り、大騒ぎになりました。

教師たちが入れ替わり壇上に上がって制止しようとしたのですが、火に油をそそぐようなもので、やればやるほど、騒ぎは大きくなります。ついには、昨今いうところの“体罰教師”を名指しで呼んで暴力に及ぼうとする者さえ出てきました。

教師たちの狼狽ぶりも見事でした。大半の先生は右往左往して

「やめろ、やめろ」

と叫ぶばかり、気の弱い先生は青ざめてただ呆然と立ちつくすだけです。日ごろ威勢のよい先生ほどオロオロしています。もはや收拾は不可能、まさに“校内暴力”の勃発寸前でした。

このとき、やおら、壇上に上がった先生がいました。荒谷先生でした。見ると、いつもの柔和な顔からは信じられない、怒りに燃えたすさまじい形相です。そして、両のこぶしを握りしめ、怒鳴りました。

「やるならやってみろ、お前たち。それでほんとうによいと思っているのか。やるならやってみろ、お前たち！」

荒谷先生が壇に上がったというだけで何か不意を打たれたように一瞬騒ぎが小さくなったのですが、

「やるならやってみろ、お前たち。よいと思うならやってみろ。おれは絶対に許さないぞ。やるならやってみろ！」

と、再び先生が怒鳴ると、次の瞬間、校庭内が嘘のように静まり返りました。たったこれだけのことで、誰にも抑えられなかった大騒ぎが一瞬のうちに収まったのです。そして、

「入れ、入れ、教室に入れ！」

と、先生が大声を上げると、生徒たちはわれに返って、先を急ぐように足早に教室目指して去っていきました。みな頭を下げ、多少の屈辱感はあるものの、まるで生死の境を抜け出したような安堵感に包まれていました。

